
魔法少女 まじかるやもり - おそらのうえのものがたり -

薰野 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女 まじかるやもり - おそれのうえのものがたり -

【ZPDF】

Z0201W

【作者名】

薫野一

【あらすじ】

* おそれのうえの、おはなしです。 *

科学が発達し、魔法が衰退した地上の都市。そこと対を成す、魔法が発達し、科学が衰退した天空の都市。そこに現れる怪物を日々退治しているのが、魔法を使つ 少年少女。

しかし、怪物達は日に日に増え、都市を荒らす。荒廃し続ける都市を救うため、ある少年少女が立ち上がった。都市を救うため、皆の笑顔を守るために。

このお話は、とある少女と、その周囲の少年少女達が描く、魔法の

物語。

プロローグ

いつだつただろう。ある日、わたしは魔法少女になつた。みんなの笑顔を、守るために。誰かの幸せを、壊さない為に。この都市を壊す、怪物達を倒す為に。みんなに希望を、届ける為に。

そんなわたしに、昨日魔法少女ギルドから一通の手紙が来た。なんでも、都市を破壊し回る強力な怪物を倒して欲しい、という依頼。普通はこういう依頼が自宅まで届くことはなくて、緊急時や、最上級クラスの魔法少女にしか届かないと聞いたことがある。ような気がする。

今回、この依頼が届いたということは、わたしが最上級クラスの魔法少女になつたということなのかもしない。……と思ったけど、そんな訳もなく、緊急時、というだけだと思う。がっかりしつつも私服に着替え、わたしのベッドに寝ている小さなパートナーの頭を引っ掴んで外へと飛び出す。「むぎゅっ」なんてパートナー　マギカが言つた氣がするけど、気にせずにギルドへと駆ける。

大概、こういう時はギルドへ行つて、仲間を集めながら出発しなきゃあいけないらしいから。手紙にそう書いてあつた。

仲間を集めるの、面倒だなあ。……なんて考えを消して、ただひたすら、ギルドへ向かつてわたしは走り続ける。

ようやく、初めての大物を倒せることに喜びを覚えながら。

第一話 希望と博愛と真実

走り続けて、ギルド到着。かかつた時間は多分一分くらい。

ギルドの中を見回せば、魔術師ギルドから派遣されている人も居た。どうでもいいけど、魔法少女ギルドと魔術師ギルドでなんで二つに分けるんだろう。あと、魔術師ギルドってなんでその名前にしたんだろ。魔法少年ギルドでいい気がするのはわたしだけかなあ。なんて。知ってるよ、魔術と魔法が違うってことぐらい。

さて、と。みんながみんな、メンバーを探している中、わたしも探さなきゃな、なんて思いながらきょろきょろと周囲を見回していたら、左肩に革の感触がした。振り向いてみると、そこには一人の魔法少女。金髪碧眼の女の子。目をぱちくりさせていたら、その子が口を開いた。

「ね、あたしと組まない？　あんたのこと知ってるよ、あの守宮やもりでしょ？」

驚いたよ、さすがに。だってわたしのこと知ってるなんて思わなかつたんだもん。思わず口が開いたけど、慌てて閉める。……わたくしてそんな有名だつたのかな？

「あははっ、驚いてる。あんたね、結構有名な魔法少女だよ？　悪い意味でも良い意味でも」

「…………ほんと？」

「ホント。あたしは嘘つかないよ」

そう言つて、可愛い子が笑う。笑った顔も可愛いなあ、なんて思つたり。……そういう悪い意味と良い意味で有名つてなんでだろ。

「あんたね、ハイテンションでカオスなのが悪い意味で有名。んで、良い意味で有名なのは、あんたが類い稀なる素質を持った、希望の魔法少女だつてこと」

「初めて知つたー」

「だろうねえ」

ハイテンションでカオスって言われるのはいつものことだから特に気にしない。うん、気にしない。それより何より、類い稀なる素質を持つた希望の魔法少女。そのフレーズが、わたしの頭の中でリピートする。うん、わたし、勝ち組。

「よつしゃあ！　いいこと聞けた！　よし、んじゃあお礼に組むことを承諾しようじやあないか！」

「くすくす、何様よ。まあいいんだけどさ。ありがとね。あたしは和泉かさね。かずみよろしく、やもり！」

「じつちこそよろしくね、かさねたん！」

金髪碧眼の魔法少女、もとい、かさねたんを仲間にできた！　なかなか強そうな子だから仲間に出来て良かつたなと思う。声かけてくれたのは向こうなんだけどね！

かさねたんの服は胸元を覆う赤い甲冑に、白いコルセット、白いミニスカート。右肩には青い肩防具。それに赤いロングブーツ。なんというか、じつ、剣士……というよりはパラディン、って感じの服装。これがかさねたんの魔法少女コスチューム。とはいっても、このおそらのうえに居る限りじやあ魔法少女コスチュームで過ごすんだけど。

それと氣のせいから、かさねたんの胸元に目がいくのは、わたしそつちの氣はないと思うんだけどなあ。

「あと一人ぐらいは欲しいなあ。にしてもやもり、その髪、どうなつてんの？　右の方、サイドテールにしてある部分だけ赤いけど」「あ、これかー。これね、地が緑髪じゆくはつだからサイドテールの部分ぐらいいは赤色にしてみようかな、つて」

へらへらと笑いながら答えると、「そりなんだー」とのんきに笑つて返してくれるかさねたん。何故だろ？　こんなやり取りでさえときめきを感じる。今まで一人だったからかな。んじゃあもう何も怖くないのかな。……あ、魔法少女の中ではもう何も怖くないはフラグだつて言われてたの忘れてた。まあいいや。

……そういう、わたしのパートナーが居ない。そう思っていたら、

酒場の方にパートナーの影が見えた。後で回収すればいいや、なんて思ったから放置。さ、仲間探し。

*

良さそうな人発見。かつこよくて強そうな人がいた！ 面食いであるやもりちゃんは食らいつく！ なんてね。面食いは事実だけど。そんなわたし、今はかさねたんに勧誘を任せてるから、ギルドの酒場で待機してたり。今回だけ何故か食い放題飲み放題。なんか、全部無料。フルーツの盛り合わせ食べてるんだけどこれがまた美味しい。ブドウおいしいよブドウ。

かさねたんが勧誘から帰つてきたのか、お任当ての人物を連れてこっちに向かってきた。ちょうど食べ終えた皿をカウンターに放置し、ついでにパートナーも驚掴んで持つていって合流。勧誘した人のお名前は月詠伊月くん。苗字、すんげーかつこいいマジかつこいい。

「わたしは守宮やもりだよー！ よろしくっ！」

「やもりか、こっちこそよろしくな」

なんでだろう、礼儀は正しいしかつこいいんだけど……どことなく世の中の十四歳がよく患う病に罹つていそうと思ったのはわたしだけでいいかも。腰くらいまでの黒髪を結つて、青髪のメッシュに入ってる。この時点で罹つてそうな感じがする。ちょっと切れ長な赤目はドストライク。うん、はっきり言って、求婚したいぐらいかっこいい。そんなことを考えてたら、かさねたんに肩を叩かれた。

「やもり、もうすぐ行こうか」

「あ、うん。……そうだ、二人のギルド称号つてなに？ わたしは希望の魔法少女だけだ」

「あたしはね、博愛^{はくあい}の魔法少女。神々しさはやもりに負けるけど、

響きはかっこいいよ」

「俺は……、眞実^{しんじつ}の魔術師、だな」

「くつそり、かつこじい……」

そんな、他愛も無い会話をしながら、出発準備をする。ぐるぐる出撃しなきやあいけないらしい。どんなのが待ち構えているのかも楽しみにしながら、愛用武器であるピペロハンマーを召喚する。召喚つてなんかかっこつけてる感じだけど。出すのは簡単で、右足で軽く地面を蹴るだけでぽんっ、と飛び出していく。新米の頃は簡単ながらも出すのに手間取ったけど、今じゃあもう当たり前。さて、わたしの初の大物。無事に倒せるかなあ……。

第一話 初めての大物、その名はキャピタルイーター

わたしの、初めての大物。これがもしも、もしもわたし達が倒せたのなら、それは、偉業いぎょうを成し遂げたも同然なんだ。緊急要請が出るほどに強い大物なんだから、それはそつだろう。わたし達が倒せたらいいな。よほど強くないと駄目いたきなんだろうけどさ。

そんな事を思いつつ、かさねたんと伊月いづきくんに「それじゃあ、行こうか」と声をかけてみる。わたしなりの、明るい笑顔を浮かべながら。

「おつけー、あたしの準備は万全！」

「俺も、不備はない」

「そんじやあ、れつづー！」

二人と一緒に、怪物の暴れ回る場所

魔界地区まかいちくへと飛んでゆく。

魔法少女だと魔術師は必ずといつていいほど飛べるものを持つている。例えば、箒わらわだと、たまには掃除機ぼうりゅうぎとかで飛ぶ子も居るし。ちなみにわたしの飛べるものはお星様ほしやまだつたりする。ワープスターみたいにな。

魔界地区へ向かっている間は各自パートナーと相談してたりするみたい。わたし達以外の魔法少女はそうしてる。まあでも、ノーブランでも平氣ひょうきでしょ。突つ込んでいつて喰らつたら喰らつたで仕方ないし。要はゴリ押しすればいいんだよ。怪物さんとのスキンシップ。

「やもり、本当に大丈夫かい？」

「大丈夫だよ、のーふろぶれむだよ！」

「大丈夫じゃなさそうな気がするんだけど……まあ、君みたいな素質ある魔法少女になら楽勝かもしけないよ」

よつしゃ、マギカにさえ認められるわたしつて凄い。……調子乗つちゃ駄目だ、何度そのせいで失敗したことか……。慎重に、かつ大胆にいかなきゃなあ。

なんて思つてゐのも束の間。すぐに、怪物のもとへとたどり着いた。

……予想はしてたんだけど、予想以上に、遙かに、……大きい。街を文字通り喰らい尽くすその名前は キャピタルイーター……なんていう名前だつたはず。依頼手紙の内容そこまで読んでないから覚えてない。

「やもりー、あれ倒せるかな？ うちの妖精にも聞いたんだけど」「だいじょーぶだよ、かさねたんと伊刃くんとわたしなら楽勝だつて！」

かさねたんの言葉に笑顔でそう返すと、わたしは星に乗つたままキャピタルイーターの側まで行き、ハンマーを振りかざす。大きなピコピコハンマーで何回叩いても、怪物はぴくりともしません。他の魔法少女達の攻撃が加えられれば、少しずつぼろぼろになつていぐぐらいだけ。見た目としてはもうホントにぼろぼろで、もう既に死んでいるんじゃないかと思えるぐらい。……だけれど。

怪物がその手らしきものを横に薙ぎ払い、その手に当たり、吹き飛ばされる。おなかの辺りが凄く痛い。

壊れた建物の壁に叩きつけられれば背中に激痛が走る。傷口に塩を塗られたような感覚。 それでも、めげずに再び星に乗つて、ハンマーで怪物の頭をなんども叩く。そこで重要なことに気がついた。

一度も、魔法を使つてない。

それはさすがにまずいと思いつつも、打撃を与え続ける。怪物の肩のほうにかさねたんが見えた。かさねたんは剣をめいっぱい、怪物に突き刺している。それを見て、わたしは怪物から少し離れたところに行き 魔法で作つた光の矢を、怪物に向けて放つ。他の魔法少女達の攻撃もあつてか、だんだんとぼろぼろになつていく怪物、キャピタルイーター。

他の魔法少女達に負けぬよう、魔法を使っては殴りを繰り返す。なんどもなんども。十回以上それを繰り返したところで 怪物がこちらのほうを向いた。わたしの方を、怪物がその赤い瞳を光らせ、

見つめる。人のかたちをした、人でないそれは、わたしに向かつて突っ込んでくる。回避しようとして、失敗した時　伊月くんがわたくしの前に出て、その怪物を撃ち抜く。銀色の長い銃を使って。わたしには型？　みたいなのがわからないから、なんの銃かはわからなければ。そして伊月くんは、わたしの方を見て　言ひ。

「一番弱ってる今がチャンスだ。お前のその魔法でトドメをさせるかもしない」

その言葉に、口元に笑みを浮かべて、頷けば　銃により怯んだ怪物の田の前に行けば、魔法を使ってみせる。

「これで……これでトドメだあああっ！…！」

大声でそう叫べば、右手を空に向けて上げ、一気に下へと振りかざす。そうすると　空から、たくさん星屑が怪物へと向けて、降り注ぐ。その星屑の雨に、ぼろぼろの怪物は苦しそうに悶えながら　消えていく。その姿を薄れさせながら。

「あれ、ほんとにトドメがさせた……？」

そう思い、じぱりくぽかんとしていれば、周りからの拍手の音。その拍手に顔を赤くさせつつも、ガツツポーズをする。初めての大物に、トドメをさせたことが、凄く嬉しくて。伊月くんも側に寄つて、微笑みながら拍手をしてくれて。かさねたんも慌てて側に来て、笑顔で抱きついてくれて。

「やもり、おめでと！　……お手柄横取りされちゃった感じだけ、嬉しいよー」

「ありがとう、かさねたん！　うんと、その……『めんね』？」

「いーよーよ、そんなん気にしないことにするからー！」

そう言って笑いあいつつ、抱きしめ合ひ。お互に喜びながら。伊月くんからも、お祝いの言葉がかけられる。

「おめでとう、よくやつたじゃないか」

「ううん、伊月くんが教えてくれたからー！」

なんて、照れながら言えば、かさねたんに余計強く抱きしめられる。更には頭を撫でられて、へらへらと笑いながら抱きしめ返す。

とにかく喜ぶわたし達。そんな中で、かさねたんが伊月くんに一言。「アンタ、言つとくけどやもりはあたしのだかんね！」

「……いきなり何言うんだ」

かさねたんの発言に少し顔を赤くさせて少しせつぽを向いた後、「ありがとう」と言つて笑う。そんなわたしの頭を、かさねたんは悪戯っぽく笑いながら無でまわす。……なんか、すつじく嬉しい。言葉にできないうらうに、嬉しかつた。拍手が響く中、ギルドからの放送が地区の中心のスピーカーから流れる。

『討伐完了を確認しました。すぐにギルドに戻つてきてください』そんな放送を聞けば、わたしたちはギルドへと帰還する。途中、何人かの魔法少女に話しかけられながら。

*

「えーっと、君は確か守衛やもりだつたね。……」ほん、ここに第千七百七十七回田の、魔法少女ギルド栄誉魔法少女として認定し、上級魔法少女としての称号を授与する…」

その言葉が告げられると同時に、歓声がわきあがる。おめでとう、だとか、すごい、だとか、いろんな声が聞こえる。

こうなったのもギルドに帰つて来た時に、ギルド創始者さんに呼ばれたからなんだけど まさかそれが、称号授与の為だとは思わなかつた。「ありがとうございます！」と言って酒場に居るかさねたんと伊月くんの所に戻れば、意外そうな顔をされた。

創始者さんの名前は知らない。年齢は多分、千は超えてるんじゃないのかな。魔法を使つてれば若いないだらつじ、この都市じゃ普通のことみたいな感じだし。

そんな事を考えていればかさねたんに背中をべしべしと叩かれる。「いやー、アンタ凄いね！……にしてもさ、アンタまさかのまさかで中級魔法少女だとは思わんかったわ。既にあたし達とおんなじ上級だと思ってた」

「俺も驚いたな。これからもっと成長すれば、この場所の歴史を覆すような魔法少女になれるかもしれないな」

「そ、そんなことないよ！」

あはは、と苦笑いしながら言いつ。顔が熱い、多分顔真っ赤かも。なんて、フルーツ盛りを食べながら思う。酒場の食べ物がこれから半永久的にただらしい。心中で思い切りガツツポーズをしたのは秘密だけどね。フルーツ盛りがこれから食べ放題だからね、そりや喜ぶよ。

キウイ、林檎^(りんご)、オレンジ、パインと食べていると、かさねたんに耳打ちをされた。

「ギルドの方に、あたしとやもりと伊丹のチーム申請しといたから！ アンタ上級になれたでしょ？ だからチーム組めると思つてさ！」

なんて嬉しい言葉をわたしの耳に突っ込みながら、かさねたんは笑う。可愛い、明るい笑みを浮かべて。その笑みにつられて笑い、かさねたんに頭を撫でられる。伊丹くんの方を見れば、クスクスクと笑われる。一人の反応に顔を赤くさせつつも、笑顔を浮かべる。

「よつしゃ、んじやあ明日も会えるよね？」

「ああ、俺はいいぞ。いつでもフリーだ。今日も夜なら予定が空いている」

「あたしもあたしもー！」

なんて、三人でそんな会話を交わしつつ笑いあつて、飲み食いしつつギルドにしばらく滞在した。

他愛もないことを話し合つたり、馬鹿なことしあつたりして、時間を忘れながら楽しんでいた。一秒たりともこの小さな幸せを逃さないように。

かさねたん達と約束をしてから家に帰り、「んじやあしながらパソ

*

「コンをいじつたり漫画を読んだりアニメを見たりする。魔法が発達していく、科学が衰退している場所だけれど、パソコンやテレビぐらいの電化製品なり地上からの輸入物として安易に入手できる。だからこそのおそれの「えはおそらくのうえなりに暮らしあやすかつたりする。

相棒の妖精であるマギカと時折会話をしながら、パソコンの掲示板に書き込んだりサイトを巡ったりする。そんな時に、ある書き込みに目がいった。

「……マギカ、いつち来て。これ、何かな？」

「なんだい、やもり？……それは……今日行つた怪物の居た地区

魔界地区にある、鏡だね」

「鏡？それが一体どうしたつていうの？」

「……あまり言いたくはないんだけど、そのうち知ることになるから早めに行つておこうか。実はそれは魔界まきいへと繋がる鏡なんだ。だからあの地区は、魔界地区まきいちくと呼ばれているんだよ」

そうなんだ、なんて、軽い言葉を返しながらも、それ以上は踏み込まないようにしておこうと心に決める。けれど　その鏡の向こう側には、いつてみたいと思った。持つちゃいけない感情なんだうけど、持つてしまう。好奇心という感情。今は、今だけは、その感情が凄く怖く感じた。

「マギカ、ありがとう。それ以上は言わないで平氣だよ」

「わかったよ。……知りたくもないことを教えてしまつていたなら、

「めんよ、やもしり」

「ううん、へーめ。いつちに無理に聞いて」「めんね」

しゅんと縮こまりながら答えるマギカに苦笑いをしながら、言う。子犬のような、仔猫のようなその妖精のその仕草に胸を射抜かれたような気がしなくもない。

マウスを動かす右手の近くに座ったマギカの頭を左手で撫でながら、しばらくその掲示板眺める。気になるような書き込みがあれば、それらを全部ペperしてメモ帳機能を起動させ、貼り付けたりして

保存しながら。

そつきのマジカの言葉がずっと、わたしの頭の中で響き続ける中、パソコンを終了させ、ベッドに倒れ込む。もつ今日は疲れたから、寝ようかな、なんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0201w/>

魔法少女 まじかるやもり - おそらくうえのものがたり -

2011年10月7日08時13分発行